

公立大学法人公立小松大学 学長業績評価 評価書

1. 評価

評定	評価
A	優れた業績である

2. 総評

- 大学院博士後期課程の整備をもって全体が完成の見込みである。国際活動や研究活動を始め、すべての活動において全ての教員職員が貢献する、マスによる特色ある活動の実施の方向にフェーズがシフトされることを期待したい。
- 中期目標達成を視野に入れて具体的対策を明確にし、全ての課題について着実に実施されている。国際交流に関して他の大学との差別化を図るべくシリコンバレー研修や中米、アフリカ諸国との交流、ライブ講演等積極的な新規事業も目につく。その他、外部資金の獲得、大学の自己点検・評価体制の整備等学長のリーダーシップのもとでバランスよく実行されている。
- コロナ禍の影響を大きく受けた国際文化交流学科では、世界との交流が阻まれ思うように活動できなかったことが悔やまれる。しかし、他の分野では前年度を上回る実績を上げられた。その結果が就職内定率 100%の数字が物語っている。アドミッションポリシーに始まったすばらしい結果だと高く評価する。Sustain されることを期待する。
- 教育・研究においては大学院サステイナブルシステム科学研究科が始動したこと、就職内定率が 100%であったこと、学長戦略重点研究「つよみ」を立ち上げたこと、国際交流においてはリエゾンオフィスを開設したこと、地域貢献では産学合同シリコンバレー研修を成功に導いたこと、業務運営においては自己点検評価・内部質保証推進会議を立ち上げて活動したこと、など総合的にみて評価できる結果である。
- 現学長は大学の全体像がよく見えており、大きな仕事から小さな仕事まで決して手を抜かない。また、バランスよく業務にあたっている。
- 学部と大学院の講義を自ら担当する、遠方の国に自ら足を運び国際連携を強化する及び「内部質保証推進のための体制」を構築するといった、教育、国際交流、および業務運営におけるリーダーシップを発揮された。特に保健医療学部においては、学部長代行として、部局のガバナンス(環境)を改善していただいた。また、本学の認証評価のための準備を適切に進められた。さらに、本学に状況が類似する、参考にすべき公立大学を調査し、それらに自ら出向き助言を得てこられた。加えて、地域貢献に関しては、市民公開フォーラムの

開催などを積極的に行い、また自らこまつ市民大学の講師を務められている。

- 研究に関する事案に関しては、末広キャンパスの研究環境を大幅に改善いただいた。末広キャンパス(保健医療学部)には、2022年度と2023年度に計8名の新任の教員が着任するので、この研究環境の整備はとて有難いものであった。また、可能な場合は「やる気のある若手の教員への既存の学内の研究費の集中」といった取り組みを検討していただきたい。
- 財政面での課題については、人的なリソースの活用方法の改善や教員にこの課題を認識させることなども必要ではないかと思う。

#### (1) 教育 A

- 全国的に学生の質・量の確保が難しい中、学士課程、大学院修士課程のいずれにおいても入学者を確保し、教育が実施された。
- 高い志願倍率が維持されているのは、アドミッションポリシーが受験生に受け入れられているからだと高く評価したい。大学院の研究成果が出てくればさらに志願倍率は上昇するものと思われる。
- 大学院サステイナブルシステム科学研究科修士課程の入学生が定員を満たし、最初の大学院授業が滞りなく立ち上がったことは評価できる。
- キャリア教育の充実を図り、結果として2021年度に引き続き2022年度の就職内定率は100%を達成した。
- 臨床工学科において、臨床実習先となる医療施設の新たな開拓や、学生が併願して医療施設に応募できるようにしていただくなど、学生の就職活動の環境を改善していただき、2022年度の学生の就職内定時期が大幅に早くなった。
- 教育はしっかりと各学部、学科で実施されたが、その効果についての自己評価が必要である。
- 共通教育(一般科目、外国語科目、歴史教育)を重視している。専門教育では、実践的な課題解決型学修を積極的に行い、全体としてバランスの取れた教育が評価できる。
- 大学院ヘルスケアシステム科学専攻の専門科目(修士課程)である「ヘルスケアシステム概論」でも講義を担当いただいた。
- 学長、自ら担当いただいた学部共通教育科目の「医療と文化」は、毎年、保健医療学部の学生の受講希望者が多くいる。
- 教職員が学生を物心両面から支えていることが教育の根幹にあると思われる。サステイナブルであってほしい。
- コロナ感染下で学生の交流や幅広い視野・思考力・総合力の育成に資する教育の実践を評価する。
- 各学科の新生歓迎「きずな合宿」を立ち上げ、新生一人ひとりも大事にする姿勢は評価に値する。

## (2) 研究 A

- 重点研究「みらい」に代わり、特定分野の研究力強化策として予算を大型化した学長戦略重点研究「つよみ」を立ち上げたことは評価できる。また、若手の教員への強い励みになると考えられる。
- 小松の石文化と関連する「次世代考古学研究センター」の開設等今後の展開に期待したい。
- 教員の研究業績は全般的にこれまでになく高まっており、英語論文数、科研費採択件数の増加が素晴らしい。特に科研費の採択件数が約3倍となったことは特筆される。今後の共同研究・受託研究が増加することを期待する。
- IR に基づく、各研究分野の強み、弱みについての分析の元に、研究力強化の戦略、アクションプランの実施が必要である。
- 末広キャンパスに新たな研究棟と実験機器を整備していただいた。一方で、実験スペースはまだ不足しているので、スペースの確保の取り組みを継続していただきたい。

## (3) 国際交流 A

- コロナ禍でありながら、活発な活動が実施されたことを評価できる。
- グアテマラ共和国とホンジュラス共和国を訪問し、公立小松大学のリエゾンオフィスを設置する等海外との交流に果敢に取り組む姿勢は、本学の国際交流環境の整備として大きな意義があり、また、「国際都市こまつ」の推進に資する。
- 市内での国際交流活動が目立った。韓国の大学1校との交流協定の締結はこの2国間の現在の難しい政治状況を考えると、今後大きく期待したい。
- 国際協力機構(JICA)の2022年度青年研修「保健医療(地域保健)」の開催に尽力いただいた。この研修は、教員や学生に「国際的視点で医療を考える機会」を提供する上で有意義なものであった。その実行力を評価したい。また、本研修は、JICA から評価され、2023年度も継続して行うことが計画されている。

## (4) 地域連携 A

- コロナ禍により地域社会との交流が活発にできなかったが、開学時から実施されたシリコンバレー研修を地元企業の参加を得て継続実施されていることを評価する。
- こまつ市民大学、市民公開フォーラム、産学官連携事業などにより大学の知の還元が多くなされていることを評価する。
- 市民公開フォーラムでは、将来を見据えた「地域連携によるサステナビリティを世界に発信する」という重要テーマを小松市民に提供するなど、大学ならではの地域貢献を実施している。
- 看護学生によるコロナワクチン接種業務の参加は市民から高く評価され、公衆衛生活動の良い勉強となった。

- 小松市龍助町「松雲堂」で行われた「まちや DE ワークショップ」は「まちなかキャンパス」づくりを推進したという点で大変評価できる。
- 地域連携に関する取り組みは、学長がリーダーシップをとって進めており、高く評価できる。一方で、コロナ禍の影響により縮小されていた地域貢献に関する活動を、活性化するための取り組みが必要と感じられる。
- 学長、幹部のみならず、広く薄くロードを求め、地域貢献に心掛けていただきたい。

#### (5) 業務運営 A

- 保健医療学部の教員の出入りなどを始め、学長のみならず学部長・学科長・研究科長も含めたガバナンス改革、人心のグリップに向けた更なるアクションを期待したい。
- 学長のリーダーシップのもとで、各組織・会議を重視して大学運営を行っている。
- 日本の大学の課題の1つが外部研究資金をはじめとする財源確保が重要となっている。これらについて幅広く取り組む姿勢がある。
- FD・SD 研修も行われるようになってきたことから、職員のプロ意識が高まることを期待する。また、これまで以上にコストパフォーマンス意識が出てきた。
- COVID-19 の対応など学生と職員の健康と安全を維持するシステムを構築したことを評価できる。
- 感染流行や災害等リスク管理の実行に期待している。
- 内部質保証のための体制として「自己点検評価・内部質保証推進会議」を中心とした組織を再整備し、学長自ら内部質保証の規範となる大学を見学するなど、率先して推進したことは高く評価できる。
- 内部質保証推進のための体制に加えて、大学の教育の質保証のために必要となる教員評価のシステムの構築も継続して続けていただきたい。
- 保健医療学部長を併任し、当該部局のガバナンス改善に努めるなど、柔軟性のある指導者である点は評価できる。
- 保健医療学部長代行として、保健医療学部の教授会の設定などの学部ガバナンスを改善していただいた。「看護学科と臨床工学科の教員の連携の促進」や「教授以外の教員の独立性の確保」などに改善があったと感じられる。改善効果の継続性を引き続き確認していただきたい。